

---

# 生者の行進

稻庭うどん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生者の行進

### 【著者名】

【Zマーク】

Z8612L

【作者名】  
稻庭うどん

### 【あらすじ】

都会に疲れた青年医師の里帰り

ルカは疲れたな、と窓を見つめて思つた。中庭に植えられた雑木は、伸びすぎた枝をついこの間ちよん切られ、せっかく肉をつけた枝の年輪を晒し、黙つて立つていた。無邪気な小鳥が暢気に羽根を休め、轉ずつては飛んでいく。その拍子に揺れる緑が、どこか気だるげに見えた。ちょっと放つておいてくれないか。耳をすませば、そんな声が聞こえるような気がした。

ふと、葉と葉の奥に鳥がいたことに気がついた。緑色の、いや、まるで羽根の代わりに葉そのものを纏つたような鳥がひつそりと佇んでいた。思わずじつと見つめる。羽根には葉脈までしつかりとある。あれは間違いなく葉っぱだ。葉っぱが羽根の奇妙な鳥がそこにいた。羽は無惨にも虫に食われたように穴がそこら中にあいていた。

「先生、次の患者さん待つてますよ」

はつと我に帰れば白いカーテンから、看護婦が新たなカルテを押し付けた。「今日は忙しいんですから、ぱつぱつと終わらせてくださいな」というお小言も添えて。振り返れば奇妙な鳥はいなくなつていた。

休日の病院は朝からじつた返していた。労働者や子ども、学生が押し掛け、看護婦はちょこまかと二十日鼠のように走り回つていた。今月は質の悪い風邪が流行つていて、どこの病院も診療所も混んでいるらしい。いつたいあと何人診たら終わるのだろう。

ルカは疲れたな、とため息をついた。上からは数をこなせと急き立てられ、一人一人じっくり診察する時間がなく、患者は不安な顔をしたままカーテンから去つていく。しかし医師が5人しかいない救急外来、あとが詰まつて診療時間内に終わらない。

書き終えたカルテと交換し新たな患者を呼ぶよう指示を出す。時

計を見れば午後3時。あと2時間、あと2時間と呪文のように繰り返し、その顔にいつものように笑顔を貼り付ける。

「やあ、ロッテンマイヤーさん。今日は如何しましたか？」

老婆の肩で耳の生えたふわふわな毛玉が跳ねた。ぎょっと瞬きをすればすぐに消える。ルカは眉間に揉んだ。どうやら本格的に疲れているらしかった。

\* \* \*

急患のおかげで一時間の残業終え、疲労を抱えた体を引きずり、ルカは安アパートの自室に戻り、シャワーを浴びる。

学生時代から住み込み、8年になる部屋はルカの唯一の楽園だった。同僚たちは収入が安定すると早々に自分たちの新しい城を構えた。結婚し、子どもまでいる同僚も少なくない。

ルカの部屋は狭い。狭いキッチンに、バスルーム、寝るための部屋が一つ。ベッドとテーブルセット、クローゼットと本棚を置けばもういっぱいで。欲を言えばもう一つ本棚を置けるスペースが欲しいが、それだけだ。手を伸ばして少し余るくらいのこの広さをルカは気に入っていた。それにこの狭い部屋でももて余すようなはず。そんな性格では、さらに広い部屋などゴミ屋敷にしかねなかつた。部屋の隅では積み本が崩れ、ベッドには脱ぎ捨てた服が丸まつていた。部屋を掃除しに来てくれた彼女とは一ヶ月前に別れてしまつていた。

体を拭き、部屋着を着て少し休むつもりでベッドに仰向けになる。今日は母親の誕生日だった。わざわざ郊外の町まで祝いに行かなくてはならなかつた。でないと暇を持て余す母親がねちねちと文句を言つためだけにこちらに出来て来かねない。

少し休むつもりがうとうと微睡み、疲れと睡魔が手を取り意識を

拐つていいく。

懐かしい夢を見た。幼少に暮らした、田舎の夢だ。

夕暮れの広い空、様々な植物が植えられた広い庭、その中にある素朴な家。ポーチで大きな白い犬が居眠りをし、黒猫が檻の鶏を驚かす。頭の上を灰の鳩と飛んだ。

幼いルカは誰かの後ろをちょこまかとついていった。柔らかい色の茶色の髪、濃い緑の長いカーディガン。一人っ子だったルカが兄と慕つた人物だった。名前を確か、アルと言う。彼は村の高台でひとりでのんびりと暮らしていた。村の子どもとは相容れなかつたルカは毎日高台の家に駆けていった。

ルカ。アルがルカを呼び、庭隅を白い指で指した。不思議な声だつた。アル自身から発せられるのではなく、何故か周囲から響いてくる。見て、狸がいます。

指のさす方向を追うと狸が茂みから顔を出していた。見つけられたのが予想外だつたのか、片足を上げて固まつていてる。

おいで。アルがしゃがみこんで、狸に向かつて手を伸ばした。狸が釣られたように一步踏み出す ワンッ！

「う、わっ」

跳ね起きると外は真っ暗だつた。近所の犬が喧しく吠えたてる。あそここの犬は誰にでも吠える。家の前を誰かが通つたのだろう。時計を見て、しまつたとルカは顔をしかめた。9時半を過ぎていた。一休みのつもりが2時間も寝入つてしまつたらしい。家族揃つてとりましようと言つていたディナーはもう終わつているころだ。

ルカはとりあえず普段着に着替え、綺麗にラッピングされた贈り物を手に車に乗り込む。勤務先の病院は近いし、都市部は交通網が発達しているため車に乗る必要はなかつたが、休日には都会を離れ、郊外に出ることの多いルカには車は便利なものだつた。おかげで母親には年老いた父の代わりによく手伝いに呼び出されるのだが。そこだけが失敗だつた。

ルカの両親の家は郊外の街にある。そこで父は現役で開業医をやっていた。母親は近所のリーダー格となり、街を回しているらしい。医者、医者の妻というだけで人々の尊敬を集めるもので、田舎に行けば行くほど地位が上がるものらしかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8612/>

---

生者の行進

2010年10月28日08時41分発行